

## 明治二二年長崎博覧会にみる

### 地方博覧会と開催地の関係

佐野 実

はじめに

本稿の目的は、一八七九年<sup>1</sup>に開催された長崎博覧会を対象として、従来明治政府の視点から分析されることが多かった<sup>2</sup>地方博覧会の歴史の意義を、地方行政政府・社会の視点から、展覧会の具体的な展示構成をふまえて捉えなおすことである。

日本の博覧会政策の歴史は、一八六七年、幕府が徳川昭武を代表とする使節団をパリ万国博覧会に派遣したことに始まる。使節団は、博覧会が産業の近代化（殖産興業）を進める上で大きな教育普及効果を持つことを認識して帰国した。この認識は明治政府にも共有され、博覧会は同政府の殖産興業政策の大きな柱の一つとなった<sup>3</sup>。

明治政府が政策として参加または開催した博覧会は、大きく分けて三種類ある。第一に、上記のパリ万博のような国際的催事である万国博覧会である。第二に、その万国博覧会をモデルとしつつも、国際性を除去し、国内向けに開催した内国博覧会である。第三に、内国博覧会よりもさらにドメスティックに、より地域に密着して開催した地方博覧会である。

いずれの博覧会にしても、参加・開催の目的は、最新の技術や学術的成果の展示による殖産興業の奨励であった<sup>4</sup>。特に、西洋諸国からの輸入品によって国内産業が打撃を受けていた産業革命前の日本において、内国博覧会は産業政策上大きな期待が寄せられていた。具体的には、開催にあたっては外国品の出品を制限するなど、博覧

会があくまで国内技術者が切磋琢磨しあう場所として機能することが強く求められた<sup>5</sup>。そして初期の内国博覧会は、多少なりともそのような役割を果たしたとされる<sup>6</sup>。一方で国民の博覧会に対する意識は政府の意図に沿うものとはならず、一八九〇年に開催された第三回内国勸業博覧会あたりから、博覧会に対して啓蒙性よりも娯楽性を明確に求めるようになった<sup>7</sup>。そして一九〇三年の第五回内国勸業博覧会を契機として、内国博覧会は娯楽性や経済効果を主眼とした展示を中心とする「遊園地」と化したとされる<sup>8</sup>。

以上のように、内国博覧会についてはその政策意図、国民の反応、展示物に至るまで十分な分析がなされている。しかし、明治期に開催された国内向けの博覧会は内国博覧会だけではない。第三の博覧会、地方博覧会も存在する。これは各県が明治政府の意を受けて開催したもので、内国博覧会と並行して各地で多数開催されていた<sup>9</sup>。

地方博覧会の研究は、内国博覧会と比べて進んでおらず、各事例の事実確認が進められている状況にある<sup>10</sup>。これは、明治初期の地方自治体の公文書史料が十分に遺されていない、または調査研究に用いるのに適した状態で管理されていないという限定された資料環境によるところが大きい<sup>11</sup>。

こうした状況の中で生まれた先行研究は、地方博覧会に対して、政府や各県が期待した通りには、すなわち殖産興業に益するものとしては機能していなかったという理解を共有している。こうした地方博覧会の実態に対する消極的な評価は、特に日比野利信による長崎博覧会の研究において顕著である。日比野は、長崎博覧会の展示物の多くは骨董品や実用品で、県の政策意図が貫徹されなかったことを、他の地方と異なり大量かつ体系的に保管されてきた長崎県庁の公文書史料（以下、長崎県庁文書とする）を駆使して明らかにし

た。<sup>12</sup>

日比野の研究は、自治体の公文書史料に基づく地方博覧会の実証研究の水準を大きく引き上げ、かつ地方博覧会は地方行政政府が明確な意図（殖産興業）をもって主体的に開催したことを明らかにしたものである。

これに対して筆者は二つの疑問を抱いている。一つは、長崎県庁の地方博覧会に対する政策意図についてである。当時の長崎県内の状況では、明治政府が目指した殖産興業につながるような博覧会が困難であることは、長崎県庁自身が最も理解していたのではないだろうか。事実、日比野が明らかにしているように、県内の産業化の遅れに対して長崎県庁は危機感を抱いていた。<sup>13</sup> それでも長崎県庁は、地方博覧会に、殖産興業のみを期待していたのだろうか。長崎県庁は県の内情を踏まえたくて、殖産興業以外の効用も期待していたのではないだろうか。

もう一つの疑問は、実際に展示物を出品して博覧会を作り出す義務を負わされた側（地方社会）の参加意図如何である。山路勝彦によれば、そもそも地方博覧会の開催にあたって各地方社会は、それぞれの地域の独自性を自覚した上で開催に臨んでいたという。<sup>14</sup> 仮に各地の地方社会が、博覧会の開催にあたり、殖産興業という「官」から与えられた課題よりも、郷土の独自性の活用に重点を置いていたとすれば、展示内容もそれに即したものとなっていたはずである。そしてその展示は、明治政府と長崎県庁にとっては期待はずれのものであっても、地方社会にとっては自分たちの思惑通りの、地域の独自性を活用した「良質」の展示だったはずである。

つまり筆者は、地方博覧会の展示が明治政府とは異なる地方行政・社会それぞれの独自の合理性に基づいて構成され、それは現地

の地方行政政府・社会に恩恵を与えていた可能性があると考えているのである。そうであれば、地方博覧会に対する今日の消極的な評価についても、地方行政政府・社会にとっての開催意義を前提に再考すべき余地が生じるだろう。<sup>15</sup>

この仮説を、筆者は長崎博覧会を対象として検証する。同会を対象とするのは、前述のとおり関連する公文書資料の残存状況が良好だからである。

この議論を、本稿は次のような構成で展開する。まず議論の前提となる知識として当時の長崎県の概況を、経済面を中心に確認し（第一章）、その上で長崎博覧会の国際性に富んだ開催状況を再現する（第二章）。次に、その博覧会を構成する展示物を、長崎県庁と同県の地方社会がどのような動機から提供したのかを明らかにする（第三章）。最後に、そうした展示物が開催地においてどのように評価されたのかを明らかにする（第四章）。以上から、長崎県庁と地方社会が地方博覧会に何を求めていたのか、また求めていたものをどのほど獲得できていたのかを理解できるようにするはずである。

結論を先取りすると、長崎県庁と同県の地方社会は長崎博覧会を、外国人に対して長崎県の歴史・文化と、代表的な輸出品を紹介する場として活用し、それぞれ一定の成果を収めていた。長崎博覧会は開催地にとって実利を伴う有意の催事だったのである。この成功は、そのような展示を外国人が求めていたことを、長崎県庁とその地方社会が正確に理解していたからこそ生じた。つまり長崎博覧会では、開港前から蓄積されてきた国際性という長崎の特長が、開催地の官民の手によって遺憾なく発揮されていたのである。

## 第一章 博覧会開催当時の長崎県の経済状況

長崎博覧会の実態を解明する前に、博覧会開催当時の長崎県の経済状況と、それを長崎県庁がどのように理解していたのかを確認しておきたい。これについては、前掲日比野論文がすでに言及している。本章は、その成果を『長崎県史』などで補強したものである。<sup>16</sup>

明治初期の長崎県の産業構造については『長崎県史』が古島敏雄作『明治七年府県物産表』に基づいて整理している。これによれば、同時期の長崎県の物産構成は農産物が約六〇%、工産物が約二三%であった。工産物の割合は全国平均の三分の二ほどであり、工業化の遅れは明らかであった。<sup>17</sup>

そこで長崎県庁は、まず主力の農業を強化するため植物試験場を設立した。しかし試験場は農作物の品種改良を研究する場ではなく、苗や種の販売所として機能してしまった。農業の他にも、長崎県庁は製糸業、缶詰製造業、製茶業などの育成にも努めたが、いずれも大きな成果を得ることはなく、一八八一年までに全て中止された。<sup>19</sup> このように、当時の長崎県では十分に産業が育成されていなかった。長崎県庁が殖産興業に尽力したのは明治政府の意向だけでなく、県の内情からも必要と認識したためであろう。

次に、長崎博覧会が開催された時期の長崎の貿易がどのようなものであったか、開催が予定された一八七七年と実際に開催された一八七九年（西南戦争による延期）<sup>20</sup>の前後三年を含む一八七四年から一八八二年までを主な時期区分として、明治政府が作成した統計資料『大日本輸出入年表』と、イギリス外務省の駐日本外交官による本国宛報告書 *Commercial Reports* を参考に概観してみよう。

当該時期の長崎の貿易は全体として西南戦争の影響を受けた

一八七七年を除いて成長傾向（輸出増・輸入減）にあった。これには上海を中心とする華僑ネットワークの中で神戸・横浜と朝鮮半島をつなぐ中継港として活用されていたことが大きい。<sup>21</sup>

輸出の主力は石炭や茶、俵物などの一次産品であった。これに対応するかのようには、輸入品では綿糸のほか更紗などの織物、さらにシャツなどの衣料に関わる軽工業品が目立つ。日本全体の工業化が進み綿糸・綿織物の輸入代替が始まるのは一八八〇年代後半であり、二〇世紀に入るとランプや石鹸、洋傘などの西洋からもたらされた雑貨類も東アジアに輸出されるようになっていく。<sup>23</sup> 長崎博覧会は、こうした変化の過渡期に開催されたのである。そしてこのことは、第二章で詳述するとおり長崎博覧会の展示の構成に大きな影響を与えた。

さて、これら主要な貿易品の取扱は、輸出入ともに、ほぼ中国人貿易商に独占されていた。*Commercial Reports* には、彼らが取引を牛耳る様子がほぼ毎号に記録されている。<sup>24</sup> 対外貿易を生命線とする長崎の地域経済において、中国人貿易商は大きなプレゼンスを有していた。<sup>25</sup> また、彼らの活躍を日々目にする長崎の人々にとって、開港後も変わらず「外国」は身近な存在だったのである。

このような経済状況の中で、長崎博覧会の開催が決定された。これに対して開催地はどのような博覧会を作り出そうとしたのか。次章では、この点について博覧会の展示物を主たる分析対象として検討していく。

## 第二章 長崎博覧会の実態

長崎博覧会が開催されたのは一八七九年三月一五日のことであ



る。開催期間は、当初六〇日間と予定されていたが、その後観覧者数が想定外に多いため、長崎県庁から博覧会の運営を委託されていた長崎博覧会社の要望で同年六月四日まで延長となった。<sup>26</sup>

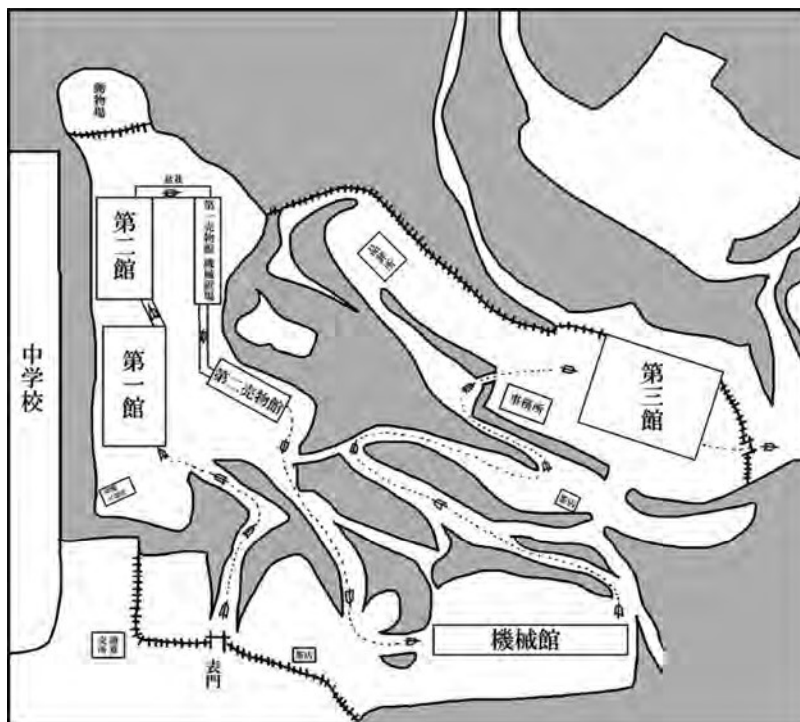
長崎博覧会の入場料は日曜日が一〇銭、平日は八銭で、チケットの色（赤と白）が異なっていた。<sup>29</sup> どちらも当時の長崎の人々にとっては高価であり、購入できない者も多かった。<sup>30</sup>

会場となったのは長崎公園であった。長崎県庁文書の一つである「長崎博覧会報告並規則」には、会場の地図が添付されている。これを筆者が簡略化したものが【図一】「長崎博覧会場略図」である。ここに四つのパビリオン（第一―三館と機械館）と二つの即売会場（第一、二売物館）が設けられ、観覧者は図中の導線に従って移動した。<sup>31</sup> 建物の広さから、主たるパビリオンは第三館であったと思われる。<sup>32</sup>

博覧会の展示物は『長崎博覧会列品目録』にほぼ全てが記載されており、日比野が『西海新聞』から明らかにした通り骨董品や実用品が多いことに気づく。<sup>33</sup>

展示物の中核を占めた優品は、一八七九年一月二日に博覧会場「本館」（おそらく第三館）を再利用して開設された博物館に一〇月二日付で引き継がれた。<sup>35</sup> 当時の博覧会では、展示物の多くは閉会后にパビリオンごと博物館として再利用されており、長崎博覧会もその例外ではなかった。このため、一八七七年の時点で長崎県庁は出品者が希望するならば展示物を買収する相談を受け付けると明言していた。<sup>37</sup> 博物館への引継品は、この相談を経て、引き継ぐだけの価値があると思なされた上で買い取られたものであり、展示物中の優品であったと考えてよいだろう。これを表にしたものが【表一】「博覧会引継物品一覧」である。<sup>38</sup>

【図一】長崎博覧会場略図



出典)「長崎博覧会場独案内」長崎歴史文化博物館収蔵「長崎博覧会報告並規則」(へ17/227) 所収を参考に筆者作成。

【表一】を見ると、博覧会の展示について次の二つの特徴に気づく。まず、この時期の長崎県庁が育成を試みた軽工業（製糸業、缶詰製造業、製茶業）の成果物と思われる展示物が引き継がれていない点である（博物館での長期保存が困難な茶葉が引き継がれなかったのは自然なことである）。長崎博覧会が開催された時点で、県が注力



【表一】 博覧会引継物品一覧

展示品名	個数	展示品名	個数
ランプ	8 個	茶箱	1 個
合羽	3 枚	右付属	
法被	3 枚	蓮葉形茶盆	1 個
椅子	9 脚	急須	1 個
卓	3 脚	茶碗	5 個
高机	4 脚	茶壺	5 個
提バラ	2 個	煎媒	1 個
糊入桶	1 個	建水	1 個
手水盥	2 個	時計 大小	2 個
烟草盆	5 個	担当箱	3 個
土瓶	5 個	帳筆筒	3 個
急須	2 個	金箱 生糸入	1 個
鉄葉茶入	2 個	金箱 廢通券入	2 個
糊入	2 個	櫃 帳簿入	4 個
小燈	2 個	権衡 大小	2 個
水納	2 個	内国博覧会図額	5 枚
算盤	3 挺	硯箱	3 個
鉄瓶	1 個	刷毛	3 枚
茶釜	1 個	裁物危刀	2 個
茶盆	5 個	鋸	3 挺
茶碗 大小	20 個	各館鍵	1 箱
砥石	2 個	諸門鍵	
田子	1 荷	藁箒	1 本
塵取 竹	2 個	一問張箱	1 個
塵取 木	1 個	印箱	1 個
炭取 藤組	1 個	状箱	1 個
炭取 木作	1 個	履吹 小	2 個
火箸	3 振	水入	4 個
銅湯騰シ	1 個	花塵	1 枚
土風爐	1 個	検水器	1 個
手水鉢	1 個	ほふぐ籠	2 個
小桶	4 個	紙製ノゴミ取	1 個
桃灯	5 個		

出典)「第二号 長崎博覧会係ヨリ物品引継之件」長崎歴史文化博物館収蔵「勸業課商工務係事務簿 明治九年ヨリ同一六年迄 公園之部 博物館之部」(17/272/12) 所収を参考に筆者作成。

した軽工業は博物館に移管できるだけの品質の商品を生産できては  
いかなかったのである。

ではどのような展示物に買い取る価値があると認められたのか。  
改めて【表一】を見ると、やはり骨董品や実用品が多いことが分か  
る。骨董品の中では茶道具が多い。骨董品が展示の主力であったこ  
とは、長崎博覧会が江戸時代以来の骨董品を用いた娯楽性の高い「見  
世物」的な催事としての一面を有していたことを意味する。<sup>39)</sup>  
実用品は二種類に分けられる。一つは、そろばんや塵取りなどの  
開国以前から使われていたような品である。もう一つは、ランプや

刷毛(ブラシ)といった開国以後に使われるようになった品である。  
後者は二〇世紀以降に輸入代替化が達成され輸出品となっていくも  
のであり、<sup>40)</sup>『長崎博覧会列品目録』によれば、これらは全て国産品  
である。たとえば大黒町の小曾根正樹が自作のガラス製ランプを出  
品している。<sup>42)</sup>これから輸出の主力を担うべき商品として展示された  
優品だったのであろう。実際、この小曾根のガラス製品は長崎博覧  
会開催の同年から中国に向けて輸出されることになる。<sup>43)</sup>長崎博覧会  
の展示は、工業製品輸入代替化の過渡期の様子を今に伝えるものと  
も言える。

最後に、煙草盆や土瓶などの工芸品である。上記のランプやブラシといった軽工業品がまだ輸入品の代表格であったのに対して、これら工芸品はこの時点の、すなわち産業革命前の日本の主力輸出品であった。<sup>44</sup>

以上のように、長崎博覧会は対外貿易の現在と未来の主力商品を展示していたのである。この事實は、長崎県庁とその地方社会の長崎博覧会に対する意識を考える上で大きな意味を持つ。なぜなら、長崎県庁と長崎の地方社会はこれら対外貿易で取扱われているものを展示することで、博覧会を即売会または輸出品の見本市として活用していた可能性が生じるからである。つまり、国際貿易港である長崎の官民は長崎博覧会に外国人の購入意欲を刺激するようなものを展示し経済的利益を見込んでいた可能性があるのである。と言うことは、長崎博覧会の前近代的な展示は、開催地が主体性をもって、意図的に構成したものである。

次章では、長崎県庁と地方社会がこのような展示を構成した動機を、骨董品、実用品、工芸品の三種類それぞれについて、より詳細に分析する。

### 第三章 博覧会への出品の動機

#### 一 骨董品を出品した動機

日比野によれば、長崎県庁は博覧会開催にあたり、地方社会に半ば義務として出品を命じていた。各地の出品者はそれぞれの区戸長から「勸諭」され、仕方なくその場しのぎで、うわべだけ技巧が施されたようなものを作成・出品していったのである。よって、この「勸諭」とは、出品を事実上努力目標化するような行政からの

指示と受け止めて差し支えないだろう。<sup>45</sup>

長崎県庁は展示物を集めるため、こうした「鞭」の他に「飴」も用意した。開催の前年、各町村に出品を促すため「古器物其他知識開達ノ益アル見込ノモノ」の輸送費は長崎博覧会社が負担するという優遇措置を設けた。<sup>46</sup>つまり長崎県庁は、骨董品の出品を推奨していたのである。この点は、従来長崎県庁が博覧会に対して明治政府同様に殖産興業のみを目的としていたとする理解と異なる事実として重要である。

加えて長崎県庁は、教部省の管理下にあった踏絵を展示することの許可を同省に求めている。踏絵は西洋人に強い関心向けられており、かねてより購入・閲覧希望があった。一方長崎県庁はこうした西洋人の希望を警戒しており、一八七四年、教部省に踏絵を委譲した。これにより踏絵は長崎県内の倉庫に保管された。長崎県庁は、この踏絵を博覧会に展示したいと求めたのである。<sup>47</sup>このことから、長崎県庁は西洋人の興味関心を惹くような骨董品の展示に積極的であったことが見て取れる。なお、この申請は踏絵が対外関係に影響を及ぼしかねない品であることから却下されている。<sup>48</sup>

このように、長崎県庁は骨董品をそろえるために様々な策を講じていた。一方地方社会にとって骨董品の出品は、輸送費が軽減されるため、長崎県庁の要求に対して比較的少ない経済的負担で応えるものであった。

以上から、長崎博覧会の展示の傾向は産業力の低さから作り出されたと一概に判断するのは難しいと言えるだろう。長崎県庁と地方社会の双方が、骨董品を主力とする博覧会となることを望んでいた可能性が認められるのである。

## 二 実用品を出品した動機

次に、実用品を出品した動機について考えてみよう。日比野によれば、長崎博覧会に展示された実用品は最新の技術を駆使したものではなく、骨董品のような希少性もなく、観覧したところで娯楽性を感じられるものでもなかった<sup>49</sup>。国産の工業製品としては最先端の品であるランプやブラシには技術力の向上が見て取れるが、これらとて実用品の域を出るものではなく、展示することで娯楽性を得られるものではない。さらに長崎県庁は、これら実用品に対しては輸送料の肩代わりを認めなかった。つまり、実用品の出品には、骨董品と同じような出品のメリットが長崎県庁にも地方社会にもなかった。それでもなお、大量の実用品が展示されていたのはなぜか。

筆者はその理由を、これら実用品が販売目的で展示されていた点に求めたい。そもそも会場には、「長崎博覧会場略図」に見て取れるように展示用のパビリオンとは別に「売物館」が設けられており、ここでは第一・二館の展示物を購入できた<sup>50</sup>。つまり博覧会は出品者が経済的な利益を得る場でもあったのである。長崎県庁自身、開催にあたり実用品については購入されることを考え可能な限り廉価とすることを推奨している<sup>51</sup>。

博覧会に販売会的性格が求められたのは長崎博覧会に限ったことではない。たとえば村川友彦は福島県下の博覧会を例として、地方博覧会が、伝統工芸品の生産・販売者に、当時の消費者のニーズに応じた図案の変容や、商品を流通させるための組織作りなど、近代資本主義的な経営への移行に必要な対応を促したことを論じている<sup>52</sup>。また吉見俊哉は、博覧会での販売行動に伴う非日常的なスペクタクル感が百貨店的な消費の場を生み、それは近代資本主義的な消

費社会誕生の要因となったことを論じている<sup>53</sup>。

これらの事例と同様に、長崎博覧会も販売会として機能することを開催地から期待されていたのだろう。

このように、博覧会の販売会的機能に注視すると、輸入代替化の過渡期であることを示す国産のランプやブラシの展示にも長崎県庁と地方社会の経済的な意図が見えてくる。これらは単に長崎県の工業化の進捗を顕示するだけでなく、今後国産化を進めて輸出していく予定の商品を前もって市場に披露するものでもあったのだろう。

整理すると、実用品の展示は経済的利益を求めるもので、その中でも工業化の過程を示すランプ等はこれから売り出す外国市場を意識した新商品の紹介を目的として展示されたものと考えられるのである。

すなわち、長崎博覧会には部分的ではあるが殖産興業を正確に理解した上で構成された展示が存在したのである。

## 三 工芸品を出品した動機

最後に工芸品を出品した動機であるが、これはさきの二つの動機、すなわち長崎県庁の意図（殖産興業）と、経済的利益の追求の二つが混合したものと考ええる。

まずは長崎県庁の意図について考える。殖産興業の目指すところの一つは、付加価値が高く海外市場で外国産品と対等にわたりあえるような商品の開発、それが可能となるための産業の近代化である。しかし、長崎の地方社会はそれに正面から応えうるだけの技術はなかった。そこで、まずは主力輸出品である工芸品<sup>54</sup>を展示したのでは



ないだろうか。

次に経済的利益の追求という動機について考える。次節で詳しく述べるが、長崎博覧会には地域の人々よりもむしろ外国人の方が強い関心を示していた。工芸品は、彼らの購買意欲を刺激するために展示されたのではないか。たとえば、香蘭社のカップとソーサーのセットなど、西洋人の利用に適したものが展示されている。<sup>55</sup>この時期の日本の陶磁器は、輸出品として優秀であり、この香蘭社からの出品物は長崎博覧会において一等褒賞を得た。<sup>57</sup>輸出向け陶磁器は、長崎博覧会の「花形」だったのである。開催地の工芸品展示にかかる熱意が見てとれよう。

こうした実用品と工芸品の二種類の展示から筆者は、長崎の地方社会は外国市場の需要を理解した上で展示を構成し、経済的な利益を追求していたと考える。<sup>58</sup>この理解は、地方博覧会に対して長崎県庁の「命令」に随い、やむをえず前近代的なものを持ち寄ったという従来のイメージとは大きく異なる。筆者は、地方社会は長崎博覧会への出品に、経済的な利益を見越して主体的に取り組み、長崎県庁もまたそれを認めていたと考えるのである。

以上のように、長崎県庁と地方社会は長崎博覧会の開催にあたり、動機をもって主体的に骨董品、実用品、工芸品を展示した可能性が高い。長崎博覧会の前近代的な展示は、明治政府の希望（殖産興業）に答えられなかったものであると同時に、応えることよりも現状で可能な限りコストを抑えつつ、外国人の興味関心に応じて開催地の歴史・文化を紹介し、加えて外国市場の需要に即した商品を紹介した結果とも言えるのである。

では、こうした展示は外国人にどのように評価されたのか。次章ではこの点を見ていく。

#### 第四章 展示物に対する外国人の反応に見られる長崎博覧会の国

##### 際性

##### 一 西洋人の反応

長崎博覧会に展示された骨董品や工芸品に最も大きな関心を寄せたのは、現地に住まう外国人、とくに西洋人であった。『西海新聞』は、開会式当日から多くの西洋人が観覧に訪れたことを報じている。<sup>59</sup>

西洋人の長崎博覧会に対する感想については長崎で刊行されていた英字の地方紙 *The Rising Sun & Nagasaki Express*（以下 *R&N* と略）の現地取材や社説、読者からの投稿などから見て取れる。

以下、本章では *R&N* を用いて、西洋人がどのように長崎博覧会を観覧・評価したのかを「長崎博覧会場略図」の導線に従って再現する。そこから、長崎博覧会が当時の日本国内のいかなる内国博覧会・地方博覧会とも異なる特長、すなわち国際性を帯びていたことが次第に明らかになってくる。なお、記事群に記されていた展示物を本文中で逐次紹介するのは煩雑であるため、それらを書き出し、骨董品や工芸品などに分類（分類項目は筆者作成）した【表二】「*The Rising Sun & Nagasaki Express* 等で確認できる展示物」を用意したので、適宜参照されたい。

先ず第一館では、主として工芸品が展示されていたことが詳細に記録されている。当時の主力輸出品である工芸品は、長崎の地においても西洋人の関心を惹いたのである。前述の香蘭社のものと特定できる有田焼が登場するのも、このパビリオンである。<sup>60</sup>更に高島炭もこの第一館に展示された。

このような工芸品や高島炭の展示は明らかに外国市場を意識した

ものであり、西洋人社会はその意図を開催前から正確に理解していたことが分かっている。中国に住まう西洋人の多くが購読していた英字誌 *The North-China Herald and Supreme Court & Consular Gazette* (以下 *NCH* と略) は、長崎博覧会は同地の対外貿易に刺激を与えるものであり、その影響は会期を越えて続くものと信じているとコメントしている。<sup>61</sup>

続いて第二館の展示を見てみよう。第二館では、展示の様相が一変する。後醍醐天皇の皇子で元弘の乱において活躍した大塔宮の甲冑などの骨董品のほか、秀吉の朱印状といった古文書の類まで展示されていた。これらの中でも荒木宗太郎に関する遺物、特に宗太郎が旗印としたジャンク船の絵は、安南国王女との逸話(「アニオーさん」の逸話。詳細は本稿中では割愛する。)とともに特に外国人の強い関心を惹いた。<sup>62</sup> また絹やサテンなど、当時の代表的な輸入品の一部もこのパビリオンに展示されていた。

これら第一・二館の展示物は、前述のとおり第一・二売物館で購入可能であった。<sup>63</sup> ただ、常識的に考えて大塔宮の甲冑などの古美術品は販売されず、あくまで有田焼や絹などがその対象であったと推測する。

その第一売物館は、機械置き場も兼ねていた。ここには農具や本木小太郎活版機械など、動力を必要としない機械類も展示されていた。<sup>64</sup>

動力を必要とする機械の多くは機械館で取り上げられていた。ここでは飽の浦から持ち込まれた旋盤、のこ盤、蒸気船の模型などが展示されていた。<sup>65</sup> 長崎県内の技術力を示すこのパビリオンは殖産興業を目的とする県にとって政策意図を徹底する上で重要であったと思われるが、*REN* を見る限り西洋人の関心は他の骨董品や工芸品

などと比べて明らかに低い。主たる出品者も工部省の下部機関である長崎工作分局であり、この時期の県内民間企業の技術力の低さがかがえる。

そして本館である第三館では、第二館に続いて再び骨董品が登場する。皇族の遺物も展示されており、ここにはおそらく全展示物の中で特に展示する価値があると長崎県庁が考えたものが集められたのだろう。

他に第三館のみが有する展示物としては、戦利品があげられる(何の戦いによるものかは不明)。近代の博覧会は「帝国の支配を正当化する文化装置」としても利用されていたが、<sup>66</sup> 長崎博覧会においてもそうした機能が期待されていたのかもしれない。

また外国人からの出品物が展示されているのも第三館の特徴である。「清国李氏」からの出品とは、李鴻章からの出品予定があったことを意味する。このことは、長崎博覧会に対する当時の清朝官界の関心の高さを示すものと言える。しかし残念ながら、李の本拠地である天津の港はこのころ凍結しており船を出せず、代わりに上海の官商に出品させることになった。<sup>67</sup> 長崎の代表的な華僑である泰益号(この時期は泰昌号)も、「外国人之部」に大硯と玳瑁全甲を出品している。

こうした第三館の展示構成から筆者は、長崎県庁の長崎博覧会に対する開催意図について、日比野とは異なる見解を持つ。もし長崎県庁が、明治政府同様に殖産興業のみを旨としていたのであれば、本館に相当する第三館に機械類や工業製品を展示したはずである。それを回避したということは、長崎県庁は長崎博覧会が技術力を示すものとなることは現状では難しく、むしろ県の歴史・文化や中国との友好関係をアピールすることを望んでいたのではないだろうか。

【表二】 *The Rising Sun & Nagasaki Express* で確認できる展示物

	骨董	工芸	工業	農業	自然科学	外国からの出品	国産掲揚の品
第1館		<ul style="list-style-type: none"> <li>水彩で彩られたかのような精巧な刺繍で絹に描かれた東京丸とテネシー号</li> <li>絵画</li> <li>刺繍</li> <li>麦藁細工</li> <li>真珠</li> <li>青磁</li> <li>県産の銀のフォークとナイフ</li> <li>有田焼のペアの花瓶</li> <li>有田焼の菊と桜を象った花輪</li> <li>香蘭社の有田焼製品(皿、大皿、カップ&amp;ソーサー、三つの大きな花瓶、二つの巨大なランプ)</li> </ul>	高島炭坑のサンプル			<ul style="list-style-type: none"> <li>貝</li> <li>螺</li> </ul>	
第2館	<ul style="list-style-type: none"> <li>オランダ人商人がサンプルとして持ってきたもの(京都に住んでいたオランダ人から型紙をもらったと伝わるオランダ風のコート、天明・安永年間に長崎で作られたフリーメイソンのエプロン)</li> <li>九州の親王が所有していた京都の中心部が描かれた300年前のもの伝わる屏風</li> <li>魚の町の魚屋組合出品のガラス美術品コレクション(150年前に作られた魚とエビが入った二つのざる等)</li> <li>150年以上前の薩摩から来た磁器の獅子</li> <li>大塔宮の甲冑</li> <li>秀吉の朱印状</li> <li>桜町の紳士が持つ200年前の修理済みオランダ製時計</li> <li>荒木宗太郎に関する遺物</li> <li>荒木宗太郎が旗印とするのために描かれたジャンク船の絵</li> <li>オランダ風に描かれた平戸港の絵</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>扇子</li> <li>百種類位以上のお決まりのハイフ</li> <li>刺繍</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>鉱物のコレクション(主として高島炭を含む石炭)</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>絹</li> <li>サテン</li> </ul>	
第1売物館 兼 機械置き場			<ul style="list-style-type: none"> <li>女紅場莫大小製造機械</li> <li>本木小太郎活版機械</li> <li>農具其他各種機械</li> </ul>				
第2売物館							
機械館			<ul style="list-style-type: none"> <li>旋盤</li> <li>のこ盤</li> <li>蒸気船のモデル</li> <li>長崎工作分局の機械類(水潜器械、経3インチハンドポンプ、八馬力ホルテール機械、6インチ半踏ロクロ盤、サンプル、道具類、製造用の資材[木材等]見本)</li> <li>ロクロ盤</li> <li>突下ケロクロ盤</li> <li>ダウントン氏創始甲板上用ポンプ</li> <li>タンゲー氏創始スペシャルポンプ</li> <li>「7インチセトリンヒュガルポンプ」</li> <li>博覧会社製糸機械</li> <li>勸業課風機ポンプ</li> </ul>				
第3館	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本の皇族の遺物</li> <li>過去の貴族の様々な階級を示す記章</li> <li>12～15フィート四方の涅槃図のタペストリー</li> <li>書き物</li> <li>兜</li> <li>歴史を感じさせる独創的な衣服</li> <li>コインのコレクション</li> <li>古い漆器</li> <li>古い韓国のラッパ</li> <li>一箱の絹織物</li> </ul>	絹製品				<ul style="list-style-type: none"> <li>「清国李氏」からの出品</li> <li>中国「諸家」からの出品</li> <li>「外国客家」からの出品</li> <li>大俣と玳瑁全甲(泰昌号から)</li> </ul>	戦利品
不明				<ul style="list-style-type: none"> <li>果物</li> <li>花</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>解剖のプレート</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>カニ(Mr.Paulから、剥製?)</li> <li>鳥(Mr.Ringerから、剥製?)</li> </ul>	

出典) “The Rising Sun & Nagasaki Express.” *R&N*, Mar. 15, 1879; “The Rising Sun & Nagasaki Express.” *R&N*, Mar. 22, 1879; “LOCAL & GENERAL.” *R&N*, Apr. 5, 1879; “The Rising Sun & Nagasaki Express.” *R&N*, Jun. 7, 1879 を参考に筆者作成。



展示物の紹介の最後に、現時点ではどのパビリオンに展示されたかは不明であるが、西洋人が出品した動物（おそらく剥製）を取り上げておきたい。これらは長崎博覧会の会期終了直前に出品されたものである。このような西洋人による学術性を有する展示物の出品は、開会前に想定されていなかったようで、【表二】にあるMr. PaulおよびMr. Ringer名義で出品された展示物は『長崎博覧会列品目録』中で確認できない。出品を希望する西洋人は急増したものの、会期延長後の閉会の決定が急であったため、出品できた者はごく一部に限られた。R&Nには、このことを残念に思う意見が掲載されている。<sup>68</sup>

以上から分かるとおり、長崎博覧会の展示物のうち日本の歴史・文化を感じられる骨董品や、当時の主たる輸出品である工芸品の展示は、どちらも西洋人から歓迎されていた。<sup>69</sup>長崎県庁とその地方社会が意図的に構成した前近代的な展示は、西洋人の学術的・経済的需要に應えるべく構成され、またその役目を果たし得ていたのである。<sup>70</sup>

## 二 長崎華僑の反応

長崎博覧会に対して、西洋人だけでなく中国人もまた関心を寄せていた。長崎博覧会の存在は中国の官界に限らず、その民衆にも広く知られていた。彼らは、上海を中心に読まれていた全国紙『申報』を通じて、長崎博覧会の情報に触れていた。たとえば一八七九年三月三日、「東洋西京長崎開設博覧会啓」と言う広告が、「大日本博覧会主人」名義で打たれている。また五月三日には、博覧会で中国人書家がアドリブで創作を披露するパフォーマンスを行う旨が記

載されている。『西海新聞』よればこの書家は銭子琴<sup>72</sup>であり、画家の王治梅<sup>73</sup>らとともに来日している。書画の他にも複数回にわたり清楽が演奏された。<sup>75</sup>これは「清国人」による演奏の他隋陽亭の娼妓によるものもあり、その演奏は「開會以來未曾有の盛事」であったという。<sup>76</sup>

このように長崎博覧会内で日中文化交流が展開される状況の下で、長崎華僑たちも同会に注目していた。彼らは博覧会開催に合わせて中国から大量に展示物を輸入し、それを販売することを計画した。長崎博覧会は、長崎華僑に輸入品貿易を一時的に拡大する好機でもあったのである。

長崎華僑は一八七六年一〇月―十一月ごろ、日頃から彼らの陳情などを受け付けていた長崎県外務課に対して、上海から輸入した博覧会出品用の商品（すなわち展示物）に対する長崎税関での免税を申請した。申請した全一二社とその出身地、そして上海から展示物を輸出するパートナーの商社を表にしたものが、【表三】<sup>77</sup>「長崎博覧会における展示物に対する免税申請華僑商社一覧」である。【表三】にある華僑は、上海からの出品と販売が可能な規模の経営をなし、かつ展示物のための免税を公的機関に申請できるだけの社会的地位を有していた。すなわち、当時の長崎華僑社会の代表的な者たちと考えて差支えないだろう。

長崎華僑の免税申請は、次のようなものであった。

- ① 中国では、ヨーロッパの例にならって、外国からもたらされる博覧会の展示物は海関で免税となる。
- ② この例にならない、我々は上海から輸送する展示物に対して長崎税関で免税して欲しい。

③ 展示物は博覧会で販売する。会場内で売れた展示物については長崎税関に輸入税を後納する。売れなかった分についてのみ免税として欲しい。<sup>78</sup>

まず③から、売れたものについてのみ輸入税を後納するということは、一定数の販売の目処が立っていたということであり、長崎華僑が長崎博覧会に対して販売会としての機能を期待していたことが分かる。

この点よりも本稿にとって重要な意味持つのは①である。この免税申請が長崎華僑による突発的なものではなく、当時の国際的な博覧会における通例であったことが分かる。長崎華僑はこうした国際的慣習を知悉していたのである。以降、この免税を便宜上「博覧会特別免税」と呼びたい。

では、長崎華僑はどのようにして「博覧会特別免税」を知っていたのか。それは、彼らが対外貿易を通じて深い関係を維持していた清朝が、当時の東アジアにおける博覧会文化の「先進国」であり、「博覧会特別免税」を日本より先に学習していたからであろう。<sup>79</sup>

清朝は日本より早く、一九世紀半ばには世界市場に組み込まれており、ヨーロッパで起こりつつあった博覧会ブームにも巻き込まれていた。<sup>80</sup>そして明治政府は、長崎華僑からの免税申請について清朝政府に照会したことをきっかけに、在北京総領事・品川忠道と江海関道・馮煥光のやりとりを通じて「博覧会特別免税」の存在、そしてその運用上の留意点を学ぶことになった。具体的には、「博覧会特別免税」が国際的慣習であること、そしてこの慣習には外国産のもの全てを展示物と称して免税対象の品として輸出することが可能になってしまいうリスクがあること、以上の二点を清朝政府との協議

【表三】長崎博覧会における出品に対する免税申請華僑商社一覧

免税申請華僑商社	上海におけるパートナー商社	免税申請華僑商社主の出身地
大記号	南順泰東棧	福建省同安
昇記号	履祥洋行	福建省同安
徳泰号	協徳号	福建省同安
泰昌号	祥泰洋行	福建省同安
泰記号	馬立師洋行	浙江省定海
徳盛号	太古洋行	(不明)
永吉祥号	譚瑞記	広東省新会
永祥泰号	広怡隆	広東省新会
広裕隆号	同記棧	広東省南海
仁泰号	上海無行棧	福建省同安
永豊号	祥泰洋行	福建省同安

出典) 布目潮瀆「明治一一年長崎華僑試論——清民人名戸籍簿を中心として」山田信夫編『日本華僑と文化摩擦』巖南堂書店、1983年、214～216頁。光緒2年12月14日収、日本領事函称長崎開設博覧会商民品物請照西例免税業経駁復抄録往来函稿請查照由(中央研究院近代史研究所档案館所蔵・外交档案、外務部档案01-27、9-1-10)を参考に筆者作成。

を通じて学んだのである<sup>81</sup>。更に明治政府は、このリスクに備えて世界的に採られていた対策、すなわち税関での審査制の必要も同じく清朝政府から学んだ。そして学術的な価値が認められるもの、または殖産興業に役立つもののみを免税の対象として認める審査制を設けた。この審査基準からも、明治政府が博覧会に殖産興業など実学的な効用を期待していたことが見て取れる<sup>82</sup>。

審査を受けた結果、長崎華僑は長崎博覧会をビジネスチャンスとして活用することができなかった。このことは『長崎博覧会列品目録』で確認できる彼らの展示物から明らかである。それを表にまとめたものが【表四】「長崎博覧会における『清国人』出品物一覧」である。【表三】に登場した華僑の姿はほぼ見当たらず、また展示品も骨董品がその大半を占めていることが分かる。この対応には、内国博覧会開催の折に見られた明治政府の、国内向きの博覧会はあくまで国内産業の切磋琢磨のために行われるべきであるという考えも影響していたのだろう。

このように長崎華僑による免税申請は結果として彼らに経済的な利益をたらさなかったが、現場での処理自体は円滑に行われたようである。

長崎県庁文書に含まれている長崎県外務課に関する史料（「外務課事務簿」）を見ると、同課が長崎税関と密に連絡をとっていたことがわかる。たとえば一八七七年、華僑の永豊号が輸出する海鼠の量が、税関への事前の申告と異なっていたことが、長崎税関長から外務課に報告されている<sup>83</sup>。対外貿易において華僑が起こしたトラブルについて、外務課は長崎税関から逐次報告を受けていたのである。もし長崎華僑の免税申請に何か問題が生じていたのであれば、同様に外務課に報告があがっているはずであるが、筆者が調査した限り

【表四】長崎博覧会における「清国人」展示物一覧

出品者	展示物
◎泰昌号	大硯, 玳瑁全甲
泗合盛	象牙細工船, 熊子2隻
◎泰記号	王原祁山水帖, 人物翎毛帖, 唐虎山水横披, 董其昌書幅, 海瑞書幅
信記号	大楂筆, 付属原品筆毛7種, 筆入筆筒, 筆棹, 整筆具14品, 鶴形杉木盆栽, 鹿形杉木盆栽
陳福勳	臂擱3種, 飯箸2種, 景德鎮磁器花瓶, 帽筒, 楊州漆器飯箸, 小皿7, 紹興酒, 薰腿, 墨8種, 筆5種, 銅庭山鉄鉢4種, 帽筒, 筆筒
鼎泰号	銀製祭具雛形, 太極, 甘露亭, 玉兔, 金鶏, 鶴筥, 鼎爐, 玉罄, 仙桃, 金鐘, 茗盃, 仙橋, 度船, 鹿瓶, 硝子硯屏, 鏡, 硯屏, 線香立
義記号	白犀牛尾

出典)『長崎博覧会列品目録』第三館演園芸場、三四頁。『長崎博覧会列品目録』追加、三五～三六頁を参考に筆者作成。出品者中表3で確認できるものには「◎」を付した。なお、陳福勳の展示物中「小皿7」は原文では「小皿 七」とある。「小皿七種」の誤植と考える。また鼎泰号の展示物については、「太極」以下が「銀製祭具雛形」の詳細である可能性がある。



少なくとも一八七七年から一八八〇年の間に、そのような報告がなされた形跡はない。よって少なくとも、長崎華僑の免税申請は大きなトラブルを起こすことなく処理されたと考えられる。

とまれ長崎博覧会は、長崎の対外貿易において大きな影響力を有していた中国人にも、経済的利益を獲得する好機たる魅力的な催事と認識されていたのである。

#### 結論

長崎博覧会の特長を一言で表すならば、国際性である。東アジア海域の交易都市として蓄積してきた豊かな国際性を帯びた地方博覧会を舞台に、長崎県庁と同県の地方社会は明治政府が求めた殖産興業を開催当初から主たる目的とせず、県の現状（工業力や輸出品の構成）及び外国人社会の需要を正確に理解したうえで、骨董品等の展示を通じて歴史・文化交流を展開し、さらに当時の主力輸出品である工芸品の紹介と売買を通じて積極的に経済効果をも享受していたのである。つまり、長崎博覧会の前近代的な展示は、長崎が有する国際性を文化と経済の両面で発露させるのに最適なものだったのである。

以上に述べた本稿の見解は、従来の「官」の政策意図に軸を置いた地方博覧会に対する消極的な評価とは一線を画する。地方博覧会の研究は、視点を地方社会に据えることで、その歴史的意義を再考しうる余地を多分に残しているのである。

最後に、本研究の今後の展望を述べておきたい。本稿を通じて筆者は、長崎博覧会が地方社会に益したのみならず、明治政府の博覧会政策にも有意の影響を与えた可能性があると考えに至った。

第四章で述べたとおり、長崎博覧会には、長崎華僑が会場での販売を想定し、上海からの出品を試みていた。長崎博覧会は明治日本にとってほぼはじめて経験する国内を開催地とした国際的な博覧会であった。従って、明治政府は長崎博覧会を通じて、外国からの出品が可能な博覧会を開催する際に当時の列強が事前に準備していた、税制上の対応を学ぶことになった。それが「博覧会特別免税」に対する審査制の導入である。

つまり、長崎華僑による免税申請は、明治政府に国際的慣習としての「博覧会特別免税」の存在と危険性を認知させ、さらに、その危険を回避できるように（つまり万国博覧会の開催に適したものへと）税関の体制を一部改めさせたのである。

明治政府にとって、この経験はその後博覧会政策をすすめるにあたり、大きな財産となったのではないだろうか。そうであれば、長崎博覧会は広い意味で明治政府の殖産興業に益したと言うことができるだろう。この点については、その後の日本政府の博覧会政策全体を踏まえた上で、別稿を期して慎重に検討したい。

（長崎県文化振興課主任学芸員）

- <sup>1</sup> 本稿では日本と清朝の元号が混在することの煩雑さを避けるため、基本的に本文中の年月日表記は西暦で統一する。
- <sup>2</sup> 具体的な著書・論文のタイトルは後述するが、まずは代表的なもののみ列挙すると、丸山宏「明治初期の京都博覧会」吉田光邦編『万国博覧会の研究』思文閣出版、一九八六年。吉見俊哉『博覧会の政治学——まなざしの近代』講談社版、二〇一〇年。大貫涼子「地方博覧会の変容（序論）——明治前期を中心として」『國學院大學博物館学紀要』第三七号、二〇一二年三月。そして本稿が最も参照した日比野利信「長崎県における勸業政策の展開と博覧会——明治一二年の長崎博覧会をめぐって」中村賢編『開国と近代化』吉川弘文館、一九九七年。
- <sup>3</sup> 國雄行『博覧会と明治の日本』吉川弘文館、二〇一〇年、二七〇～二七四頁。三宅拓也『近代日本へ陳列所を研究』思文閣、二〇一五年、六五頁。
- <sup>4</sup> 清川雪彦「殖産興業政策としての博覧会・共進会の意義——その普及促進機能の評価」『経済研究』第三九巻第四号、一九八八年一〇月、三五八頁。國雄行『博覧会の時代——明治政府の博覧会政策』岩田書院、二〇〇五年、九〇～一二頁。前掲國雄行『博覧会と明治の日本』八七頁。
- <sup>5</sup> 前掲國雄行『博覧会の時代』一〇、七一～七二頁、二四六～二五三頁。村川友彦「明治後期の地方勸業博覧会・共進会」『福島県歴史資料館研究紀要』第二二号、一九九三年三月、二〇頁。
- <sup>6</sup> 前掲國雄行『博覧会の時代』二七八～二七九頁。村川友彦「明治期の博覧会と近代日本——第五回内国勸業博覧会と福島県勸業政策」『東北学院大学東北文化研究所紀要』第二九号、一九九七年八月、一〇七頁。
- <sup>7</sup> 前掲國雄行『博覧会と明治の日本』一三〇頁。
- <sup>8</sup> 前掲國雄行『博覧会の時代』二五五～二七四頁。前掲國雄行『博覧会と明治の日本』一七九～一八四頁。谷地彩「明治期における発明と特許・博覧会」『上智大学文化交渉学研究』第五号、二〇一七年三月、三二～三三頁。
- <sup>9</sup> なお「遊園地」化したとされる第五回内国勸業博覧会を前にしても、明治政府は殖産興業を目的とした催事とすることに拘泥し、またその理念を貫徹するため各地を指導・監督していたことが分かっている。前掲村川友彦「明治期の博覧会と近代日本」一〇八～一一一頁。
- <sup>10</sup> 前掲日比野利信「長崎県における勸業政策の展開と博覧会」二五九頁。
- <sup>11</sup> たとえば前掲丸山宏「明治初期の京都博覧会」P・F・コーニッキー「明治五年の和歌山博覧会とその周辺」。前掲吉田光邦編『万国博覧会の研究』。前掲日比野利信「長崎県における勸業政策の展開と博覧会」。塩原佳則「明治初年代における地方博覧会の歴史的意義——筑摩県下博覧会を事例として」『日本歴史』第七六八号、二〇一二年五月など。
- <sup>12</sup> 前掲大貫涼子「地方博覧会の変容（序論）」四頁。
- <sup>13</sup> 前掲日比野利信「長崎県における勸業政策の展開と博覧会」二八六頁。
- <sup>14</sup> 前掲日比野利信「長崎県における勸業政策の展開と博覧会」二六三～二六六頁。

<sup>14</sup> 山路勝彦『地方都市の覚醒——大正昭和戦前史博覧会編』関西学院出版会、二〇一七年、vi頁。

<sup>15</sup> なお、日比野は「地方において開催された博覧会については消極的な評価しか与えられておらず、これまではほとんど論ぜられることがなかった」と先行研究を整理した上で、長崎県が殖産興業を意図して地方博覧会を開催したことから「地方博覧会に対する消極的な評価は、少なくとも開催の論理からみれば改められる必要があるだろう」としている。日比野もまた本稿と同じく地方博覧会の再評価を試みているわけだが、その論点は長崎県の開催意図にあり、長崎博覧会の実態に対する評価を改めることを目的としてはいない。本稿が、日比野の地方博覧会に対する評価が消極的であるとするのは、博覧会の実態に対する評価についてである。前掲日比野利信「長崎県における勸業政策の展開と博覧会」二六〇、二八六頁。

<sup>16</sup> 前掲日比野利信「長崎県における勸業政策の展開と博覧会」二五九〜二七二頁。

<sup>17</sup> 長崎県史編集委員会編『長崎県史』吉川弘文館、一九七六年、六八頁。  
<sup>18</sup> 特に製茶業では紅茶の製造に力を入れており、政府の西洋化の方針に応えようとする傾向が見て取れる。

<sup>19</sup> 「興業意見」『明治前期財政経済史史料集成』第二〇巻所収、二五八頁。

<sup>20</sup> 明治十一年五月三日付外務省宛長崎県令北島秀朝（外務省外交史料館所蔵「外務省記録」三門一五類一項「長崎ニ於テ人民結社博覧会開設一件」）。

<sup>21</sup> 一般的には、長崎は開港と同時に日本の代表的な国際貿易港とし

ての地位を神戸・横浜にゆずつたとされているが、長崎が東アジア海域交易のメインストリームから脱落するのは一八九〇年代以降のことである。瀬野精一郎『長崎県の歴史』山川出版社、一九七二年、二一四〜二一六頁。古田和子『上海ネットワークと近代東アジア』東京大学出版会、二〇〇〇年、五九頁。

<sup>22</sup> 谷本雅之「日本綿業とグローバルヒストリー」水島司編『グローバルヒストリーの挑戦』山川出版社、二〇〇八年、一三一〜一三二頁など。

<sup>23</sup> 秋田茂「アジア国際秩序とイギリス帝国、ヘゲモニー」前掲水島司編『グローバルヒストリーの挑戦』一一〇頁など。

<sup>24</sup> 正式名称は *Commercial Reports by Her Majesty's Consuls in Japan*。以下 *CR* と略。『Nagasaki, CR 1873, p.81; 'Inlosure I Summary of the Foreign Trade of Japan for the Year 1876, Summary of CR 1876, p.3; 'Nagasaki, CR 1877, p.68; 'Nagasaki, CR 1878, p.55; 'Nagasaki, CR 1879, p.47; 'Nagasaki, Japan No.1 (1882) CR 1881, p.71; 'Nagasaki, Japan No.4 (1883) CR 1882, p.36.

<sup>25</sup> この時期の拡大する日本の対中輸出において、中国人貿易商が大きなシェアを占めていたこと、それに対する日本人貿易商の反応については籠谷直人「一八八〇年代の日本をとりまく国際環境の変化——中国人貿易商の動きに注目して」『経営研究』第二巻第二号、一九八九年三月、二一七〜二二六頁。渡辺千尋「対中経済進出の拠点としての上海——日本商の直接進出を支えたシステム」小風秀雅、季武嘉也編『グローバル化の中の近代日本——基軸と展開』有志社、二〇一五年、三三二〜三五三頁など参照。ま



た、渡辺は第五回内国勸業博覧会が日本の生産者と中国商に直接交流する機会を与え、これが輸出拡大を招いたことを明らかにしている。この事実は博覧会が国際貿易に影響を及ぼしうることを表しており、本稿への示唆に富む。前掲渡辺千尋「対中経済進出の拠点としての上海」三四二―三四五頁。

<sup>26</sup> 「雑報」『西海新聞』一八七九年四月二六日。

<sup>27</sup> 社長は、西海新聞社長でもあった本田実。長崎博覧会の実施の許可を長崎県から得て、一八七六年一月四日には開催決定の告知を県令名で発している。長崎博覧会社の設立経緯等については別稿を期して明らかにしたい。『西海新聞』『長崎事典』『産業社会編』長崎文献社、一九八九年、三七四頁。「一四一号 諏訪神社境内博覧会場開設ニ付参集縦覧」長崎歴史文化博物館収蔵「県庁甲号全 明治九年」(一四〇/六七一一) 所収。

<sup>28</sup> 明治一二年四月二五日付長崎県令内海忠勝から外務大少書記官宛勸第五一号、前掲「長崎ニ於テ人民結社博覧会開設一件」。

<sup>29</sup> 『読売新聞』一八七七年一月二二日朝刊(記事題名なし)。なおこの価格設定に対して『読売新聞』は高すぎるとし、更に「遠方の事ハよく知れませぬけれど」と皮肉めいた一文を付している。

<sup>30</sup> そこで、とある西洋人がチケットを大量に購入し、これを子供や人力車夫に「施し」ていたそうである。「雑報」『西海新聞』一八七九年三月一八日。

『西海新聞』はこの逸話を「流石西洋人ハ違た者だ」と好意的に評しており、全国紙である『読売新聞』も十日遅れでこのことを報道している。「新聞」『読売新聞』一八七九年三月二八日。この逸話は西洋人にも好まれたようで、さらに十日ほど遅れて中

国における英字の全国紙でも紹介された。『NAGASAKI, The North-China Herald and Supreme Court & Consular Gazette, Apr. 4, 1879.

<sup>31</sup> 「長崎博覧会場独案内」長崎歴史文化博物館収蔵「長崎博覧会報告並規則」(へ一七/二二七) 所収。

<sup>32</sup> 会場内の展示物の配置などについては日比野がすでに「長崎博覧会内区分之図」長崎歴史文化博物館収蔵(一七/七六一)を参考に図化しているため、ここでは割愛する。前掲日比野利信「長崎県における勸業政策の展開と博覧会」二七八―二七九頁。

<sup>33</sup> 『長崎博覧会列品目録』。前掲日比野利信「長崎県における勸業政策の展開と博覧会」二八四頁。

なお『長崎博覧会列品目録』について、筆者は東京大学附属図書館所蔵のもの(南葵文庫版と田中文庫版)を調査した。両者には違いがある。たとえば南葵文庫版には会場内の地図等が同封されているが、これは田中文庫版にはない。逆に田中文庫版のみ目録の価格が記されているようなこともある。本稿での引用は田中文庫版に準拠している。

また『長崎博覧会列品目録』中の展示物をその性格や製作地ごとに分類・整理することで、長崎博覧会の実態をさらに詳細に分析できると思われるが、紙幅の都合上割愛した。本稿では、長崎県政府と同地方社会は外国人社会を意識して展示を構成しており、その意図はある程度貫徹されたという点のみ議論したい。

<sup>34</sup> 「長崎博覧会 公式記録二」(乃村工藝社「博覧会資料 COLLECTION」一五〇四/三一―四二)。

<sup>35</sup> 「第二号 長崎博覧会係ヨリ物品引継之件」長崎歴史文化博物館

収蔵「勸業課商工務係事務簿 明治九年ヨリ同一六年迄 公園之部 博物館之部」(二七/二七二/一) 所収。

<sup>36</sup> 関秀夫『博物館の誕生——町田久成と東京帝室博物館』岩波新書、二〇〇五年、四四～六九頁。

<sup>37</sup> 「広告」『読売新聞』一八七七年一月二二日朝刊。

<sup>38</sup> 「第二号 長崎博覧会係ヨリ物品引継之件」長崎歴史文化博物館収蔵「勸業課商工務係事務簿 明治九年ヨリ同一六年迄 公園之部 博物館之部」(二七/二七二/一) 所収。

<sup>39</sup> 日本における博覧会の「見世物」的性格については前掲大貫涼子「地方博覧会の変容(序論)——明治前期を中心として」四～七、九頁。前掲吉見俊哉『博覧会の政治学』三〇～三二頁。前掲村川友彦「明治期の博覧会と近代日本——第五回内国勸業博覧会と福島県勸業政策」一〇八頁など参照。

<sup>40</sup> ランプについては前掲秋田茂「アジア国際秩序とイギリス帝国、ヘゲモニー」一一〇頁など、ブラシについては杉山伸也「国際環境と外国貿易」梅村又次、山本有造編『開港と維新』日本経済史三、岩波書店、一九八九年、一九八頁。沢井実「一九一〇年代における輸出雑貨工業の展開——ブラシ・貝ボタン・瑠璃鉄器」『北星論集(経済学部)』第二四号、一九八七年三月、三八～三九頁など参照。

<sup>41</sup> 一八七七年、長崎においてガラス工場を設立し、翌年には石炭を燃料とした洋式製法で食器等を作成した。同様の工法で舷灯用赤ガラスを製作したのもこの時と思われる。会田軍太夫「わが国における特殊ガラスの発達(Ⅲ)『窯業協会誌』第六四集第七二二号、一九五六年三月、一四頁。後藤勇雄「文明開化期における日用雑

器の発生と形成」『デザイン理論』第一五号、一九七六年一月、四六頁。

<sup>42</sup> 『長崎博覧会列品目録』第一館、四～五頁。

<sup>43</sup> 前掲会田軍太夫「わが国における特殊ガラスの発達(Ⅲ)」一四頁。

<sup>44</sup> 輸出品としての陶磁器が大量生産されるまでについては宮地英敏『近代日本の陶磁器業——産業発展と生産組織の複層性』名古屋大学出版会、二〇〇八年、二八七～二九三頁に詳しい。そのほか畑智子「明治一〇年代の輸出品にみる日本イメージの創出」『デザイン理論』第三五号、一九九六年一月、一～二頁。安永幸史「起立工商会社の輸出品製造事業に関する考察」『美術史論集』第一二二号、二〇一二年二月、四四頁。井上祐里「商工省工芸指導所と輸出品」『芸叢』第三〇号、二〇一五年三月、四五頁。松下久子「明治期の三川内焼頭在化への取り組みについて——国内外の博覧会出品をめぐって」『研究紀要』第一〇号、二〇一六年三月、一二二頁など。

<sup>45</sup> 前掲日比野利信「長崎県における勸業政策の展開と博覧会」二八二頁。

<sup>46</sup> 「一六四号 長崎博覧会開設二付出品々目申出方」長崎歴史文化博物館収蔵「県庁達乙号 明治一一年 乾」(一四/六七五/一/五) 所収。

<sup>47</sup> 「先年長崎県ヨリ相納候耶蘇踏絵銅版等同県博覧会陳列ニ交付ノ儀申牒ニ付伺」(国立公文書館所蔵『公文録』明治九年第五十四卷所収)。

<sup>48</sup> 「長崎県博覧会へ耶蘇踏絵銅板陳列ヲ允サス」(国立公文書館所蔵『太政類典』第二編第一六九卷所収)。

49 前掲日比野利信「長崎県における勸業政策の展開と博覧会」二八二頁。

50 「場中禁止」『長崎博覧会列品目録』第一館。『The Rising Sun & Nagasaki Express』, R&N, Mar. 15, 1879.

51 「二〇四号 博覧会開出品勧誘説論」長崎歴史文化博物館収蔵「県庁乙号達 明治九年」(一四/六七一一) 所収。

52 前掲村川友彦「明治後期の地方勸業博覧会・共進会」二九頁。

53 前掲吉見俊哉『博覧会の政治学』三〇〜三二、九一〜九九、二六五〜二六六頁。なお国産陶磁器が西洋人の生活様式に合うように対利用生産されるまでの過程については松下久子「近代日本の洋食器生産と輸出について——日本陶器のデイナーセット完成前史」森谷美保、谷口俊二、鶴飼幸代編『ノリタケデザイン一〇ゼロ年の歴史』朝日新聞社、二〇〇七年に詳しい。

54 前掲畑智子「明治一〇年代の輸出工芸品にみる日本イメージの創出」一〜二頁。前掲安永幸史「起立工商会社の輸出工芸品製造事業に関する考察」四四頁。前掲井上祐里「商工省工芸指導所と輸出工芸」四五頁など。

55 『The Rising Sun & Nagasaki Express』, R&N, Mar. 22, 1879.

56 前崎信也「明治期における清国向け日本陶磁器(一)」『デザイン理論』第六〇号、二〇一二年八月、七五〜七六頁。黄栄光「明治期における輸出陶磁器産業の変遷——起立工商会社と森村組の比較を通して」細川周平、山田奨治、佐野真由子編『新領域・次世代の日本研究』国際日本文化研究センター、二〇一六年、一三七〜一四〇頁など。

57 鎌谷親善「精磁会社(明治一二〜二六年)に関する資料と解説(三)」

『技術と文明』第八巻第一号、一九九二年七月、九〇頁、「青磁会社による第三回内国勸業博覧会(明治二三年四月一日〜七月三日)『出品解説書』(抜粋) [明治二三年初頭か]」翻刻による。

58 三月一五日の開会式翌日、『西海新聞』は社説で、殖産興業の目的は輸出入の均衡の回復であり、だからこそ博覧会は政府の支援の下で開催されるのであるとしている。つまり、博覧会開催の具体的な目的は殖産興業による輸出の拡大であり、長崎博覧会における工芸品等の輸出品の展示はこの点において合目的であったとも言える。「西海新聞」中「長崎博覧会ノ開場」『西海新聞』一八七九年三月一六日。

59 「雑報」『西海新聞』一八七九年三月一八日。

60 『The Rising Sun & Nagasaki Express』, R&N, Mar. 22, 1879.

61 『NAGASAKI』, NCH, Jan. 31, 1879.

62 『The Rising Sun & Nagasaki Express』, R&N, Mar. 22, 1879.

63 「場中禁止」『長崎博覧会列品目録』第一館。『The Rising Sun & Nagasaki Express』, R&N, Mar. 15, 1879.

64 東京築地活版製造所社長。日本の活版印刷の先駆者である本木昌造の子。「本木昌造」『長崎事典』『歴史編』長崎文献社、一九八二年、二一六頁。松尾篤三編『曲田成君略伝』松尾篤三、一八九五年、一四頁。

65 『The Rising Sun & Nagasaki Express』, R&N, Mar. 15, 1879.

66 伊藤真実子「明治日本と万国博覧会」吉川弘文館、二〇〇八年、一頁。

67 「雑報」『西海新聞』一八七九年三月二四日。

68 『The Rising Sun & Nagasaki Express』, R&N, Jun. 7, 1879.

<sup>69</sup> 骨董品が重視される一方で産業面の展示が少ないことに不満な西洋人もいたことがR&Nへの投稿から確認できる。『LOCAL & GENERAL』R&N, Apr. 5, 1879.

<sup>70</sup> 西洋人は展示内容には好意的であったが、一方で博覧会の環境には不満を抱いていた。R&Nによれば、開催場所とされた諏訪神社は高台にあり立地が悪く、またパビリオンも西洋人の目には貧相なものに映った。加えて陳列の仕方も満足のいくものではなかった。古い漆器とコインのコレクションが並んで展示されている様は、西洋人には粗雑に見えたそうである。『The Rising Sun & Nagasaki Express』R&N, Jun. 7, 1879.

この点について、筆者もまた『長崎博覧会列品目録』から、同様に長崎県政府と地方社会の展示環境に対する無頓着さを感じる。同「目録」では展示物はその性格ごとに分類されており、食料品と薬品と工芸品が混在するなど雑多な印象を受ける。これは明治日本における資料分類法の発展過程の一面を表すものかとも考えるが、別稿を期して議論したい。『長崎博覧会列品目録』第一館、二頁。

<sup>71</sup> 「東洋西京長崎開設博覧会啓」『申報』一八七九年三月三日。「長崎博覧会近状」『申報』一八七九年五月三日。

<sup>72</sup> 吉川重俊編輯「古今名家新撰書画一覽」一八八九年、神奈川県立近代美術館蔵青木文庫にその名がある。また島善高「副島種臣と銭子琴——明治初年、日中文化交流史の「コマ」」『大倉山論集』第六五輯、二〇一九年三月も参照。

<sup>73</sup> 樋口正三朗編輯「現在今世家書画一覽」一八九一年、神奈川県立近代美術館蔵青木文庫にその名がある。また鶴田武良「王寅に

ついて——来泊画人研究」『美術研究』第三一九号、一九八二年三月も参照。

<sup>74</sup> 「雑報」『西海新聞』一八七九年三月三十一日。「雑報」『西海新聞』一八七九年四月八日。

<sup>75</sup> 「雑報」『西海新聞』一八七九年四月二日。「雑報」『西海新聞』一八七九年五月十五日。

<sup>76</sup> 「雑報」『西海新聞』一八七九年五月二四日。これに続いて多くの娼妓が同様に演奏を望んだ。

<sup>77</sup> 光緒二年二月一四日収、日本領事函称長崎開設博覧会商民品物請照西例免稅業経駁復抄録往來函稿請查照由（中央研究院近代史研究所檔案館所蔵・外交檔案、外務部檔案〇一―二七、九一一―一〇）。

<sup>78</sup> 光緒二年二月一四日収、日本領事函称長崎開設博覧会商民品物請照西例免稅業経駁復抄録往來函稿請查照由（前掲外務部檔案〇一―二七、九一一―一〇）。

<sup>79</sup> 近代中国の博覧会については、徐蘇斌「オリエンタリズムとナシヨナリズム——中国の万国博覧会参加をめぐる権力の変容」佐野真由子編『万国博覧会と人間の歴史』思文閣出版、二〇一五年、五九一―六二〇頁が文化史の視点から包括的に論じている。

<sup>80</sup> 馬敏『官商之間——社会刷変中の近代紳商』武漢、華中師範大学出版社、二〇〇三年、三〇二頁。

<sup>81</sup> 光緒二年二月一四日収、日本領事函称長崎開設博覧会商民品物請照西例免稅業経駁復抄録往來函稿請查照由（前掲外務部檔案〇一―二七、九一一―一〇）。

<sup>82</sup> 明治一〇年二月一四日付外務卿寺島宗則宛大藏卿大隈重信、前掲



「長崎ニ於テ人民結社博覧会開設一件」。

<sup>83</sup> 「第五号 長崎税関長ヨリ」前掲「外務課事務簿 明治一〇年自

一月至六月 雑部 第一番」所収。

〔謝辞〕【表三】作成のため長崎中国交流史協会専務理事陳東華氏にご助力頂いた。この場を借りて篤く御礼申し上げたい。なお、誤りや至らない点があれば、それらは全て筆者の責任に帰すものである。